

# 引かれていく牛

小川未明

青空文庫



もうじきに春はるがくるので、日ひがだんだんなくなりました。晩ばん方なた、子供こどもたちが、往おうらい来らいで遊あそんでいました。孝こうちゃん、勇ゆうちゃん、年としちやんは、石いしけりをして、みつ子こさんとよし子こさんは、なわとびをしていました。

うす緑みどりいろ色いろの空そらに、頭あたまをならべている木き々のこずえは、いくらか色いろづいてるように見みえました。いろいろの木きの芽めが、もう出でようとしているのです。

ちようど、このとき、あちらから黒くろいものが、こちらへ、のそり、のそりと歩あるいてきました。

「あれ、お牛うしよ。」と、いちばん先さきにみつけたよし子こさんがいい

ました。

「どうしたんだらうね。」と、年としちゃんが、いいました。

子供こどもたちの目めは、みんなその方ほうへそそがれました。そして、遊あそぶのを忘わすれて、道みちばたによつて、通とおりかかる牛うしを見送みおくっていたのでありました。

牛うしは、年としをとつているように思おもわれました。なぜなら、毛けなみがうすくなつて、若わかい時じぶん分ぶんのようにつやがなかつたからです。それに、この牛うしは長ながいこと、田たや、畠はたけで働はたらいていたか、それとも重おもい荷にをつけた車くるまを引ひいていたので、かたのあたりけの毛けはなくなつて、皮かわがで出ていきました。これを見みた子供こどもたちは、いいあわせたように、

「かわいそうに。」と、心こころに思おもったのです。

子供こどもたちが、自分じぶんに同どう情じょうしてくれらることも知らしらずに、牛うしは、のそり、のそりと歩あるいていきました。そして、いかにも、歩あるくのがいやそうに見みえました。牛うしを引ひく男おとこは、日ひが暮くれてしまうのがきにかかると牛うしを急いそがせようと、なわのはしで、ピシりと牛うしのしりをたたきました。すると、牛うしは、はつとして、そのときは歩あゆみを早はやめたが、またいつのまにか、のそり、のそりとなるのでした。

「歩あるいていくのがいやなんだね。」と、勇ゆうちやんが、いいました。「そうよ、きつと殺ころす場所ばしょへ引ひれていかれるのを知しっているのよ。」と、よし子こさんが、いいました。

「そうじゃないだろう。」と、孝ちゃんが強<sup>つよ</sup>くうちけしました。

「いえ、いつか、ああして牛<sup>うし</sup>が連<sup>つ</sup>れていかれるのを見<sup>み</sup>たとき、兄<sup>にい</sup>さんが、そういったわ。」と、よし子<sup>こ</sup>さんがいいました。

「かわいいそうだな。」と、勇<sup>ゆう</sup>ちゃんと年<sup>とし</sup>ちゃんが、大<sup>おお</sup>きな声<sup>こえ</sup>で、いっしょにさげびました。

いつしか牛<sup>うし</sup>の姿<sup>すがた</sup>は、だんだん遠<sup>とお</sup>くなつてしまいました。みんなは、牛<sup>うし</sup>が見<sup>み</sup>えなくなるまで、その方<sup>ほう</sup>を見<sup>み</sup>送<sup>おく</sup>つていましたが、二度<sup>ど</sup>とたのしく遊<sup>あそ</sup>ぶ気<sup>き</sup>にはなれませんでした。

「ほんとうに、牛<sup>うし</sup>は知<sup>し</sup>っているんだね。」

「それはわかるさ。そして、逃<sup>に</sup>げられないということも知<sup>し</sup>っているのだ。」

「明日のいまごろは、もうお肉にくになって、町へ出るのだな。」

「わたし、お肉にくたべないわ。」

「私も。」

みつ子さんとよし子さんが、そういうと、

「そんなら、くつもはけないよ。」と、勇ゆうちやんがいったので、

みんな笑わらってしまいました。

空そらに星ほしが光ひかって、人ひとの顔かおが、はつきりわからなくなったので、

みんなは、てんでに明あかるいお家うちへかえりました、孝こうちやんのお母かあ

さんは、赤あかちやんをおぶって、おしごとをしていられました。二、

三日にちまえ前から、赤あかちやんは、気きぶん分ぶんがわるいので、お母かあさんは、も

ういく夜よもろくろくねられませんでした。

「坊や、どうなの。」と、孝ちゃんがききました。

「今日は、いくらかいようです。」と、お母さんは、おつしや  
いました。

孝ちゃんは勉強がすむと、いつものように、先に床へはい  
りました。そして、しばらく目をあけて、

「あの牛は、どうしたろう。」と、思っていました。

ほかの子供たちも、たぶん家にかえってからも、牛のことを思  
っていたでしょう。

翌日、学校のつづり方の時間に、孝ちゃんは、昨日の晩  
方、引かれていった牛のことを書いて、

「はたらいた末に殺される牛は、なんといいかわいそうなんだろ



う。」と、つけくわえました。

ほんとうに感じたことをあらわしたので、たいへんによくできたと先生はおほめになりました。そして、このつづり方を、先生は、みんなに読んできかされてから、

「だれでも、大きくなつて、もし親不孝をするならば、お母さんをこの牛のようなめにあわせるものだ。」といわれました。

孝ちゃんは、なるほど、先生のいわれたことを深く心に感じたのであります。



## 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「僕はこれからだ」フタバ書院成光館

1942（昭和17）年11月

初出：「らくみん三年生」

1941（昭和16）年3月

※表題は底本では、「引《ひ》かれていく牛《うし》」となっています。

※初出時の表題は「引かれて行く牛」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年10月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 引かれていく牛

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>